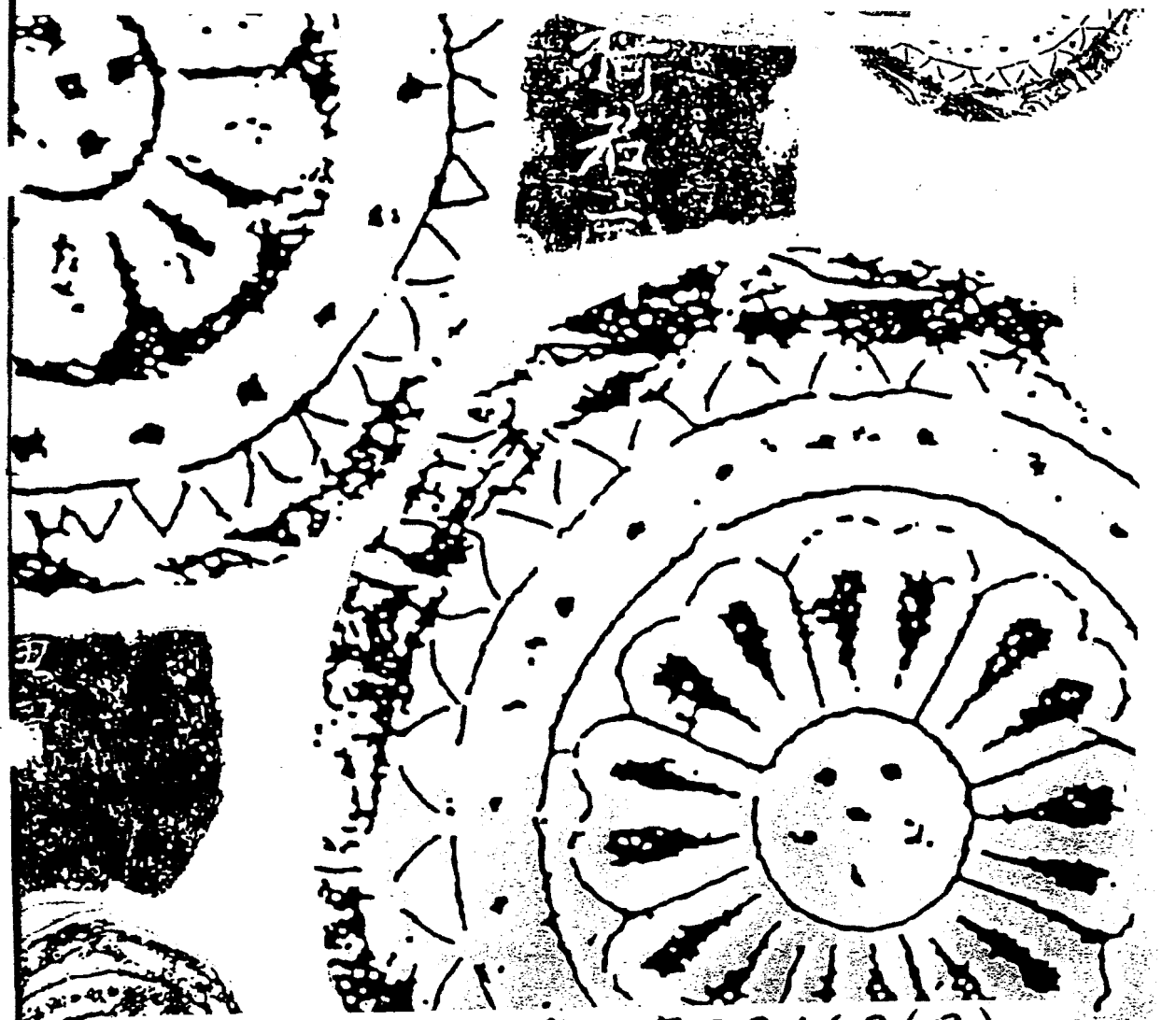
徒歩例会

蔵王山周辺の史跡を巡る

茨城、深津市の栄光をもとめて



実施日	平成15年2月16日(日)
講師	寺崎久徳・三好勝芳
主催	備陽史探訪の会

徒歩例会　# 蔵王山周辺の史跡を巡る

＜探訪スケジュール＞

場所	時刻	備考
福山駅南口釣り人前集合	９：００	
井笠バス１６番乗場発	９：２０	
千田大迫バス停着	９：４０	例会発会式
発	１０：００	
蔵王原遺跡遠望着	１０：０３	
発	１０：１３	
天神山古墳着	１０：２３	
発	１０：３３	
大迫古墳着	１０：４７	
発	１０：５７	
千塚古墳群跡着	１１：１５	
発	１１：２５	
孝霊天皇行在所跡遠望着	１１：２８	
発	１１：３８	
慶満寺着	１１：４７	
発	１１：５７	
宮ノ前廃寺着	１２：１５	
発	１２：２５	
仁伍貝塚着	１２：４０	
発	１２：５０	
蔵王公民館着	１２：５５	
昼食開始	１３：００	昼食休憩
昼食終了	１３：３０	
蔵王公民館発	１３：３５	
薬師堂着	１３：４０	
発	１３：５０	

場所	時刻	備考
医王寺着	１３：５５	
発	１４：０５	
北向き地蔵着	１４：１０	
発	１４：２０	
蔵王城下城主墓着	１４：２５	
発	１４：３５	
塩垂れ道着	１４：４０	
発	１４：５０	
惣戸神社着	１４：５５	
発	１５：０５	
上井出川着	１５：１０	
発	１５：２０	
原山遺跡着	１５：３３	
発	１５：４３	
巌山観音着	１５：５８	閉会式
発	１６：１０	

帰途バス福山駅行き

巌山バス停	１５：４０
	１６：２３
奈良津バス停	１５：３１，４３、５３
	１６：０３，１８，２７，４２

以　上

はじめに

古墳時代から奈良・平安時代にかけては、蔵王山の麓辺りまで海が深く湾入りし、深津高地から現在の宮の前廃寺にかけては、天然の良港として深津市が栄えていた。ここにはおそらく群庁も置かれ、備後国府に往く道が山陽道につながっており、深津市は国府津となっていたと思われる。それは宮の前廃寺跡出土の唐草文の軒平瓦が府中市の町廃寺跡のものと同一で、さらには同市の栗柄廃寺跡のものも同じ型の瓦が使われており、その関連性が想像されるのである。

そのころ中央政府は、山陽道の備えとして今の府中市に「芦田軍団」を置き、さらには海路の押さえとして蔵王山一帯に「茨城」の築城にも着手している。貝塚がある仁伍という地名は古代軍団にかかわる地名であり、その頃には蔵王山頂には烽〔とぶひ〕台も置かれて、多くの兵隊が屯していたのであろう。宮の前廃寺からは、わが夫の安全を祈願して奉納された「紀臣和子女」・「栗柄君」・「軽部君黒女」などの人名入り瓦が１２点も出土している。

今日はその蔵王山、深津市、そして茨城などの栄華を偲びながら巡りましょう。

蔵王原遺跡　別添図版１参照

深津市から府中の国府につながる道を進めば、右手に千塚古墳群、左手の蔵王山麓に蔵王原遺跡がある。昭和３１年に果樹園を造るために深掘り中、円形に石垣をめぐらせ、その外側に敷石を置いた遺構が出てきた。その後５０年代にも再度調査し、もろもろの遺構が判明した。

この蔵王原遺跡はに、最古式の前方後方墳かといわれる円形・方形遺構から、火葬された骨壺が出土、さらにはその隣地からは、奈良時代の蓮華文軒丸瓦を含む布目瓦〔同形と認められる瓦が備後国分寺跡や小山池廃寺跡から出土〕が発見されるなど、古墳時代から平安期にかけての首長クラスの住居跡と墓、それに寺院跡という複合遺跡と考えられている。

しかし現在はそのまま埋蔵されて今後の調査を待つこととされている。今は現地に行っても全く遺構は見られない。主たるものは次のとおりである。

円形石築遺構

半円状に５０㌢ほどの高さに２～３段の石垣をめぐらし、その外側６，６㍍位の幅に拳大の石が敷きつめられてあり、その上に須恵が散在していた。半円状の石垣はもとはほぼ円形にめぐらされていたと認められる。ここから直径１２㌢の三角縁神獣鏡〔現在は斜縁神獣鏡に訂正されている。〕が完全な状態で出土した。この鏡は「青白亘子□」の銘がある内区四神獣で作柄からみて中国製と認められる。

方形基壇

円形石築遺構の北側に接して一辺５，２㍍の石垣により積み重なった正方形の土壇で、北側両端から１，５㍍のところに階段の根石のような石組があった。土師器の破片が散在しており、建物跡と思われる。

粘土槨

方形プランの遺構のさらに北方１２㍍のところに、長さ２，２５㍍、巾０，４㍍の舟型の粘土槨が存在していた。北西隅に２個の須恵器の壺と、瑞花八稜鏡が、さらに槨の周辺に鉄片が９片出土した。この瑞花八稜鏡は、直径８㌢の唐式鏡の和製八稜鏡で奈良時代のものとされている。壺は骨壺、また鉄片は釘か刀子で、これらを総合して考察すると、この遺構は奈良期か平安初期の墓とかんがえられている。

埴輪敷石槨

粘土槨の南方で発見された。石槨は長さ２，３㍍、最大の巾０，４５㍍で、深さは０，３㍍弱である。槨の底は埴輪の破片で敷き詰められており、西に円筒埴輪が、そして東部には家形埴輪の屋根の破片が認められた。遺物はなかった。

寺院址

昭和３７年に福山市教育委員会が作成した「備後国古代寺院址地名表」に、蔵王原廃寺址から、天平時代の蓮華文軒丸瓦が出土との記載がある。

天神山古墳・千田大迫古墳・千塚古墳群跡

蔵王原遺跡の東方にある天神山の南西の麓一帯は、俗に天神原という。この南麓に仮殿のままの天神社がある。祭神は菅原道真ではない。素さ鳴尊である。この社が福山市史には式内社とある。

この社は元禄時代までは天神山山頂の烏帽子岩のところに本社があったが、ある祭礼の日に喧嘩があり社殿に血が流れたので、現在地に仮殿が造られて今日を迎えている。昭和の初めごろは福山４１連隊の兵隊さん達が、約 1,000㍍離れた坂本池の土手からこの天神原の裾野に向けて実弾射撃の訓練をしており、また終戦直前は野戦病院もあった。

実はここら辺り一帯が千塚古墳群の跡なのである。備陽六郡志には、要約すれば

> 長池の辺に塚多くある故、千塚と云う。大石を畳揚たる石窟也。太古の穴居野所なといへる棲なるへし。里人のいへるは、むかし火の雨降りたる節の棲なり。北の方よりふりけるゆえ、何れも皆南向きなり。

とある。江戸時代から今日までに殆どの古墳が破壊された。とくに昭和３０年代には残されてい十数基たの古墳も、中国農事試験場の耕作試験地を造るために消滅し、今では天神山古墳・千田大迫古墳〔２基〕・大山古墳の僅か４基が残っているのみである。千塚古墳群というから、ここに古墳が千基有ったのかと云えば答はＮＯである。

多分数百基程度は有ったのであろう。

ところでこのように、一定地域に小規模古墳が密集していることを一般的には「群集墳」と呼んでいる。しかしこれには色々な形態がある。まずこの群集墳は

○　築造期間が限定されており、その期間内に集中的に造られたのか

○　長い間にここに古墳が築かれて、結果として群集墳の形態になったのか

を判断しなくてはならない。前者は、五世紀後半から爆発的にみられるもので、その時期にこの地方を一時的に支配していた極めて強力なリーダー、およびその家族、親族ならびにそのグループの存在を考えなくてはいけない。ところが村上正名先生は、ここの古墳には「古墳時代のごく初期の箱式石棺から、巨大な横穴式石室をもつものさらには奈良時代の火葬墳にいたるまで、あるゆる形式の墓が存在し、あたかも古代墓制のモデル展示場の感がする」と述べている。

このように観ていくとこの千塚古墳群は、前記の蔵王原遺跡と一体としてみなくてはならないであろう。７２１年に安那郡は分割されて深津郡が誕生しているが、古墳時代から平安期にかけて蔵王原に居住して深津郡一帯を支配していた強力な首長やその一派、グループの墓がこの千塚古墳群なのかも判らない。

天神山古墳　別添図版２参照

天神山古墳は、現状では千塚古墳群の最北端に位置し、天神山の西北麓の南斜面の畑の中にある。封土は流れてなく大きな天井石が露出して南向きに横穴式石室がありなかなか見応えがある。昔から開口しており、出土物も判明していない。調査もされておらず、なんの解説資料もない。私は６世紀の古墳だろうと観ているが、とにかく現地でご覧になって見て下さい。

千田大迫古墳　別添図版３参照

天神山古墳の南側、天神山の麓の山裾にある。１９７０〔昭和４５〕年冬にブルトーザーで山肌を削っていたときに偶然に石室の一部が露出して発見された。その後二度の豪雨によって西側壁が崩れたため、１９７２年福山市教育委員会が緊急発掘調査を実施した。

墳丘は大半が崩されているために、墳丘築造の様子を観察することができる貴重な古墳である。墳丘の盛り土は、花崗岩の風化土と山土を交互に積み重ねているが、最上部は山崩れの堆積土で覆われている。石室は横穴式で長３，４㍍、巾１，５㍍高さ１，２㍍で南向きである。石室の床面に棺を置く棺台が４個据えられていた。

出土遺物は、この棺台付近から鉄釘と、奥壁の手前から完形の須恵器の平瓶が発見されており、これらからこの古墳は７世紀前半とみられている。

孝霊天皇行在所遠望　別添図版４参照

西備名区の巻３１、深津郡新涯沼田の項に王子塚・王子原の見出しで次の記録が載っている。「里諺に云。この地不浄をふるる時は必ず祟りあり、昔　孝霊天皇、熊襲を征伐し給ふ時、西に行幸あり。其時此処に暫く御行在たりしと云。」

また備陽六郡志の深津郡の項には次の記録がある。「長池といひて大いなる池有。此池、孝霊天皇の御宇よりありし故、カウレイ池といふを、あやまりて、ガウル池、又ゴウロ池といふ。此池の北之方を築地の内と云。是孝霊帝の皇居のあとなるべし。皇居の跡ならてハ築地とハいふまし。」

ちなみに、現在の蔵王町の字名で山陽自動車学校の北側に「築地内」および「王子原」という地名が並んで残っている。

皆さんこれを如何判断されますか？。

宮の前廃寺跡　国指定史跡　別添図版５参照

備陽六郡志には「往古、海蔵寺という寺有。当村の生土八幡は海蔵寺の鎮守なりし

とぞ、則海蔵寺の廃跡八幡の境内にありて、礎今に残れり」と記されているが、この海蔵寺が創建当初からの正式名称で有るか不明のため、「宮の前廃寺」で史跡指定された。昭和１８年県指定、同４４年に国指定となっている。調査は昭和２５・６年、４２年そして５１年と実施されている。

八幡社々殿への山道を挟んで、東に塔、西に金堂がある。

塔は、塼〔せん〕積基壇の上に中心礎石と三礎石が残存する。ここから七種類の軒丸瓦、四種類の軒平瓦、「紀臣和古女」「栗柄君」「紀臣石女」「栗麻呂」四種類の文字瓦と瓦を留める釘類が出土した。、

金堂跡には、残存礎石が三ケ有ったものの早い時期に取り去られており、原位置は判然としない。ここからは瓦、土師器、須恵器、鉄器具等が発見されたが、軒丸瓦は白鳳期、軒平瓦は一種類で、芦品郡吉田寺跡、栗柄廃寺の瓦と同一と認められる。

福山市史によれば、これらは法起寺式で、備後南部では２番目に古く、考察するにまず白鳳期に金堂が建てられ、ついで天平時代に塔が建設されたものの、平安時代のある時期に焼失したものとしている。

深津市

福山沿岸で最初にできた港は津〔津宇、今の津之郷〕であり、その次が深津市、次いで鞆ノ津、草戸千軒町の順番であろう。その中で官港は津と深津市そして鞆ノ津である。草戸千軒町は、かっては「草意地、草市、草土、草井地」などと云い、且つ書いた。これは官が設置した港ではなく、住民が生活用品を物々交換するために開いた民衆の港である。

深津市はどうであろうか。最初の序文「はじめに」で述べたように、ここは国府の港として栄えたのである。その証拠には古墳時代から奈良時代にかけてこの地方に君臨したリーダーや一族の居所であった蔵王原遺跡や、その墓地である千塚、式内社の天神社、国史跡の宮の前廃寺、さらには続日本紀７１９年の「茨城停」の記事、古代軍団が仁伍に駐屯していたことなどなど、これを裏付ける資料は豊富である。また平安初期の仏教説話集「日本霊異記」には７７８年当時に「備後に深津市という盛り場があり、布、綿、馬等が物々交換て交易されていたこと、さらには四国讃岐の人たちも来ていたこと」などが記載されている。

仁伍貝塚

仁伍という地名は古代軍団にかかわる地名である。天平時代の軍隊は兵士 1,000人の部隊を大毅、兵士 500人の部隊を少毅と呼び、最小の単位を兵士５人で「伍」と呼んだ。この「伍」が２組だから仁伍と呼んでいたのである。よってここに茨城に関連

する施設か、あるいは深津市の住民を守る兵士達か、いずれにしても５人単位の２こ班、即ち兵士１０人〔当時の軍防令によれば、３組が３交替制で勤務することとされているので、３０人の兵士が常駐していたことになる〕が駐屯する軍団の施設が置かれていたことは間違いない。したがってこの地が仁伍と呼ばれるようになったと推測できる。

またここには、古墳時代から奈良期にかけて、貝にまじって須恵器、土師器、土垂などが出土する極めて大規模且つ広範囲な貝塚が存在する。〔福山市史〕しかし現在は残念ながら団地造成工事などにより、地表に露出している所は残っていない。

原山遺跡

蔵王山系東端の蔵王ケ峯は標高２２６㍍であり、そこから南西方向に阿弥陀ケ峯〔龍王山〕、炭焼ケ鼻そして地王山と続く。概ねこの地王山麓のやや南下がりの傾斜面現在は畑作地から、かって南北で５，５㍍の間隔を置いて、４個、東西７，６㍍の２列の基礎石が出た。今は耕作で消滅しているが、此処からは今でも蓮華文軒丸瓦、唐草文軒平瓦が土師器、恵須器、鉄釘等と共に出土する。〔福山市史〕

以下、豊元国先生の茨城に関する論文集「備後茨城の所在考」を抜粋する。

「遺瓦を伴う建築遺址は２ケ所で発見された。地王山の南麓の原山と、他は地王山の頂上である。原山は、軒丸・軒平瓦共に二種類で同一年代の物である。土地がかなり傾斜しているので古寺院址ではない。茨城関係のものであれば主要な建築遺址であろう。〔註：茨城とは、続日本紀の養老３年～７１９年～１２月１５日の「備後国安那郡の茨城と芦田郡の常城を廃止した」という記事の茨城のことである。この茨城は何処にあるのか未解明である。豊元国先生は、この茨城は蔵王山一帯に有ったと推定しているのである。〕

一方、地王山山頂の軒平瓦も、原山の軒平瓦と同じ物で、地王山山頂と山下で同じ瓦を葺いた建物の存在が確認された。地王山山頂からはこの瓦のほかに、室町時代の平瓦、丸瓦の破片もあった。

茨城の瓦は、常城〔豊元国先生は、常城は府中市本山から新市町の常一帯を推定〕の瓦に比べて、各段の差がある。常城の瓦はいかにも田舎臭い。茨城の瓦がずっと立派である。これは旧山陽道の押さえの常城よりも、瀬戸内海を直接望む茨城を重要視していたのではないか。

また地王山から採取した土師器は皿や坏の蓋で国分式平行期の特長を持ち、奈良期のものに間違いない。云々というものである。

私はこ茨城の謎を求めて、原山遺跡にしばしば通った。ある日ふと気が付くと原山集落の自治会のゴミ集積場の看板に「原自治会」と書いてあった。

この「原」とは、現在は「ハラ」と読むが、かっての古代にあっては「バル」とか

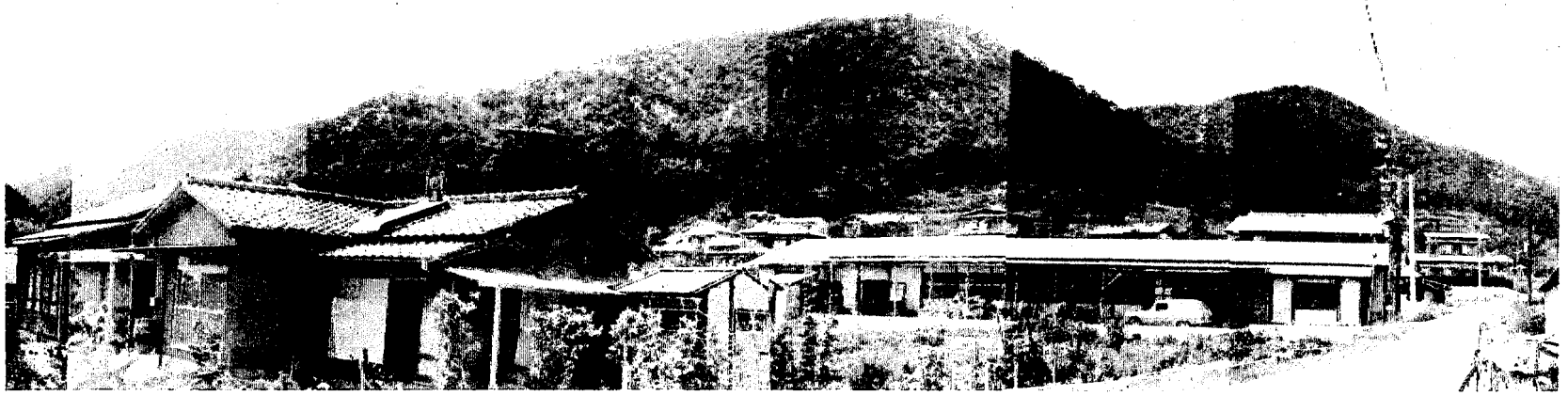
「パラ」と云っていた。すると「原城」と書けば、なんと「バラギ」となる。これが訛って「イバラギ、即ち茨城」と考えるのは飛躍しているだろうか。

また、原山集落の隣りに、綱木という地名がある。この「ツナギ」とは当時の茨城を守る軍団の馬、駒を繋ぎとめていた所とみてはいけないか。蔵王山＝茨城説に向けて夢はだんだんと脹らんでくるのである。豊元国先生が推定された「茨城址付近の地図」を参考までに添付する。

茨城址附近の地図

1：50000　井原 福山

茨城址の原山遺跡



左手前の家から自動車のある建物にかけて天平時代の古瓦や礎石が発見された。原山遺跡を南方より見たところ。　背後の山は地王山。

原山遺跡出土の軒瓦

薬師堂

薬師堂の由来

郷土福山は瀬戸内海の中心にあり、西は豊後水道、東は紀伊水道より押寄せる満ち潮の合流地点にあり、風と潮の流れを利用し、荷物を運ぶ船のしおまちの港、深い津(船着場)の在る市として、全国より品物が集まり、奈良時代を凌ぐ盛況であったと聞く。

時は平安(１１２３年)第７５代崇徳天皇、京より御遷座ありし時、（西備名区より）風光明媚の此地に立寄られ暫し疲れを癒され人馬を整え、山陰方面に向かわれたと言う。その時休まれし場所を御門と呼び地名となる。

崇徳天皇御遷座以前の建立と言われる御門の薬師堂、薬師如来は本来脳を良くする仏として信仰されて来ましたが、或る時蛸取りの漁師が数日も荒れ続く海に出て漁を始めようとした処、海の底で金色に輝く仏像を見付け、その仏像を信仰したところ生まれながら全盲の母の目がたちどころに開眼、以来薬師如来は霊験あらたかな目を治す仏として信仰されて来た。

御門(蔵王町２４３４番地)に在りし薬師堂も目を治す薬師様として地域はもとより、遠方よりの参拝者も絶えなかったと言われる。

時移り、御堂の影移す穴海消え、幾星霜、はからずもこの度山陽自動車道建設に伴い、薬師堂の移転を余儀なくされ、由緒ある歴史を後世に伝承し、永遠の利生を願い信者一同御門の地より此処に移転祭祀する。

昭和６１年８月１０日

薬師堂建設委員会

. 医王寺　阿弥陀山　（真言宗）

当山は崇徳天皇ご請願所で大治２年（1127年）の創建とされている（平安末期）本尊は薬師如来で、阿弥陀如来座像、四天王像残欠（山上伽藍のときその本堂須弥壇の四隅に鎮座していたものである。）釈迦如来座像が安置され、仏画として弘坊大師画像がある、これは弘坊大師の直筆といわれ目引大師といわれて県の重要文化財に指定されている。目引大師の画像は讃州祖谷の誕生寺の宝物であった。ある時、七幅の全く同じ画像を見せられ見覚えのあるのを持って帰る様にと言われ、何度も見比べているとこの画像に三度目が引かれこれであると持ち帰り誕生寺の寺宝となりしを同寺中興の住僧、当寺へ隠居し持来られ当寺の寺宝に慣れりと。

以前は阿弥陀ケ峰にあったが戦国時代に戦火にあい焼失して現在地に移った。当時、この地域は毛利の所領で山陰の尼子との争いが絶えずその戦火の犠牲になったものと思われる。

現本堂は文化１３年（1817）に改築、山門は大正９年(1921)に再建、鍾楼は火災を免れたものである。

境内に荒神社がある、字、天満という所にありと、宝歴５年（1756）再建のちに享和２年１０月（1803）再建とある。

又、明治５年（1873)５月、当寺を借り受け啓蒙所を設置された。

これが市村における小学校の始まりである。その学制は二等級を初、中、上、の三級に分け七才より学に就き手習い、素読、珠算の三科目を課し十才にて終わる。

翌年８月字広尾に小学校が設置される。

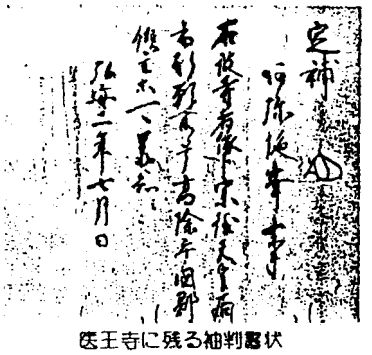
医王寺

[illegible]のふもとにあるこの寺には、二重真言宗という真言宗の寺があります。大治二年（一一二七年）重創と伝え文化財に指定される絹本著色弘法大師画像が残されています。

何かを見守っておられるようなので「目引き大師」ともいわれ、画幅の右上の隅には大師の誓願仏である弥勒菩薩が描かれています。兜率天浄土という天上に弥勒菩薩が住し、釈迦入滅後五十六億七千万年後にこの世界に現れて衆生を救うという大師の教えを図にしたもので、真言宗が布教のため諸国の真言宗の寺院に配布したものと考えられます。

前号で市村医王寺の文化財について述べましたが、同寺所蔵の古文書の中に「弘安二年七月（一二七九年七月）」の袖判書状があります。袖判とは、源頼朝が家臣の者に渡す書状を祐筆（文書・記録の執筆にあたる職）に書かせ、その文書の袖、即ち冒頭へ自ら署名したことにはじまるもので、以後庄園の所有者はこの例にならって袖判書状を支配地に発行しました。ここ医王寺に残る文書も、この地を所有する者によって書かれたものと考えられます。

文面の袖判の傍には「阿弥陀寺事」とあります。阿弥陀寺とは現在王山のことで、現在の医王寺の前身の寺はこの阿弥陀寺の谷あいにありました。阿弥陀寺という名からすると、医王寺の前寺は天台宗であったと思われます。当寺の寺には崇徳天皇が居られたことがあり、そのためその後この寺は祈願所となりました。この袖判書状には、当時の寺が祈願所ゆえに、寺の領地に対する年貢を免除するということが書かれています。本文書に出てくる崇徳天皇は、第七十五代の天皇で、保安四年（一一二三年）～長寛二年（一一六四年）の在位でその間上皇となり、保元の乱に破れ、讃岐に流され四十六歳で崩御されました。この流される道中、この市村の酒蔵寺前の港に船で入り、しばらくこの地におられた時、阿弥陀寺の谷あいの寺に滞留されたという口伝が残されています。この書状は、崇徳上皇滞留から百年後の文書となっているため、上皇居留の証明にはなりませんが、鎌倉期の文書としては貴重なものとなっています。



医王寺に残る袖判書状

北向きの地蔵さん

昔からこのお地蔵さんは信心の対象として崇められていて、願かけをして毎日坂道を上ってきてこのお地蔵さんに手を合わせていると願いが適うと言い伝えられている。自分が健康になりたいと言う一心と毎日の坂道の上り下りで足腰が丈夫になりいつの間にか願いが叶うというお地蔵さんである。

ここから北の方を見ると向こうに天神山が見える。山の頂きに烏帽子岩があり元禄の時代（1688～1704)までは山頂に社殿があり素さ鳴尊を祀る。後、平地に移り、平成元年に現在の社殿が改築された。その山頂には数百年の松の大木があり海を走る船の目印になったと言われている。山裾を西へ歩くと昔は多くの塚があり、千塚と呼ばれていたが土地の人達によりその殆どが発掘されたが今も残って保存されているのを見ることができる。この古墳は横穴式で六，七世紀 につくられたものであると言われる。

その手前にある池は長池と呼ばれ主に市村沖の水田の潅漑用水の役目をしている。別名を高霊池とも言われ高霊天皇（第７代）が吉備の国が繁栄していたころ行在所があったといういわれがあり天神山の東の裾に築地ケ内という地名があり今も山のなかの一部から瓦が出て来る。（行在所の跡地かも）

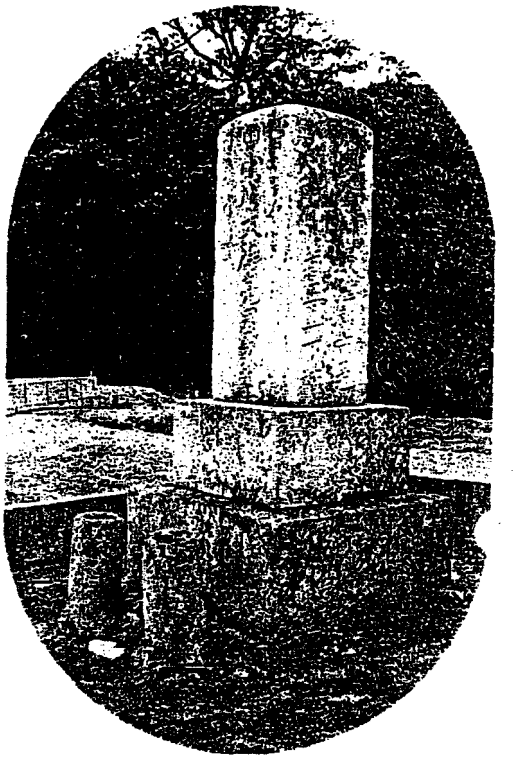
手前にある坂本池の土手から天神山の裾に向けて戦前（昭和ひとけたの時代）福山にあった歩兵第４１連隊の兵隊が実弾射撃の訓練を（距離1000m）していたので天神原は鉄砲の弾探し、山の中の岩場には水晶があり子供の遊び場であったが、終戦近くには、小学校の一部が陸軍病院の病室になったこともあり、病死された兵隊さんたちの火葬場になったこともある。

蔵王山下城　四区　坂本

坂本墓地内に1434年（永享6年）3月28日に没した蔵王山下城主小川大膳亮の墓がある。『備後古城記』によると，小川大膳亮は備中大下村高田河内守正重の家臣とある。

城跡は現存しておらずその位置や規模は定かでないが，蔵王山の南麓の余り低くないところにあったものと推測される。

また城のかたちも，天守閣や櫓をもつものではなく，簡単な豪族の居館であったと思われる。小川大膳亮は石高400石で当時の家老格に当たり，高田河内守の勢力範囲の一鎮台として市村を守護していたもので，河内守滅亡後は小川大膳亮も市村を去り，一代で終ったと伝えられている。



塩垂れ道　五区・四区綱木・大目

京都仁和寺の古文書によると，「備後深津，地九十五町，浜六町，山八十九町」とあり，現在の深津と蔵王一帯に仁和寺の荘園があったことがわかる。このうちの「浜」は，中国農業試験場稲作圃場一体と思われる。

瀬戸内海は気候温暖で雨が少ないところから製塩が行われ，この浜でも塩つくりがなされていたことが想像される。

ここで作られた塩を宮の前すなわち海蔵寺前の港まで運んだが，人夫の肩にかつがれた塩の袋から，この山坂道を上る際ポタリポタリと塩水が垂れおちたところから「しおたれ道」とか「しょったれ道」という名前がつけられたものと考えられる。

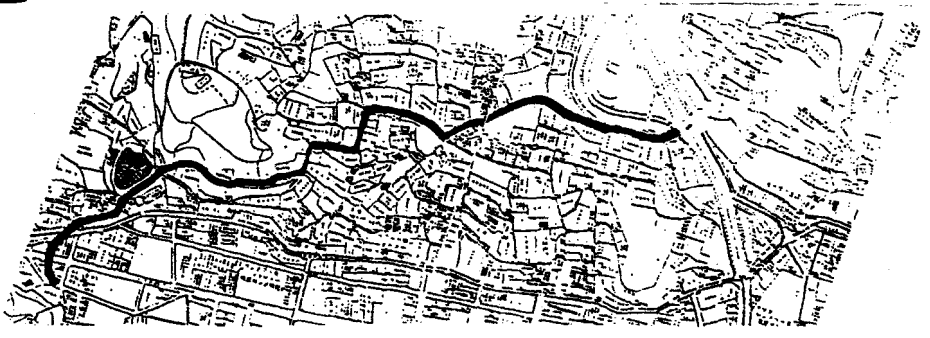
サルトロード

また、仁和寺文書中貞観十四年（八七二年）三月九日付には、「備後深津地九十五町、浜六町、山八十九町」とあり、現在の深津と蔵王一帯に、仁和寺の荘園があったことがわかります。この文書に出てくる浜は、現在の中国農業試験場東側一帯にあたり、この浜では製塩が行なわれました。瀬戸内海は気候温暖で雨が少ないことから、古くから製塩が盛んに行なわれ、その遺跡は多く発見されています。水野氏時代寛文年（一六六一～一六七三年）頃、本庄新田によって松永塩田ができ上がったことは、みなさんもよくご存知のところでしょう。

この浜の塩は、「しおたれ道」と呼ばれる山道を通って宮の前、すなわち海蔵寺の港まで運ばれました。この道は、「しおつたれ道」とも呼ばれ、塩を背中に負って坂道を登る際に、塩が垂れ落ちたことからこの名称がつけられたようです。

▲写真＝惣产山の東側より農業試験場にかけての湾曲した海際の製塩場（今は試験場の畑）

塩

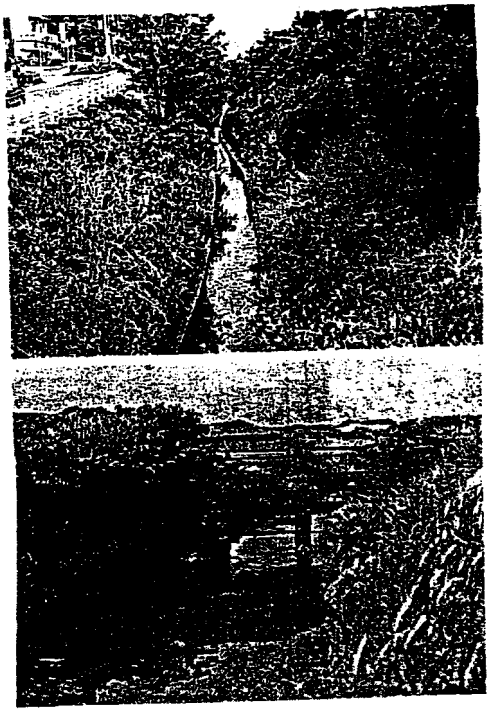


上井手川　五区～一区～六区

芦田川から取水された水は，本庄高崎で上井手川と下井手川に分かれる。下井手川は市中を通り手城に至るが，上井手川は本庄，木之庄，吉津，奈良津，深津から蔵王を経て春日吉田から南に折れ引野に至っている。

この川は水野勝俊の折，新開地へ潅漑用水を通すためになされた大工事で，とりわけ綱木付近は岩盤のため数十尺もの掘削は困難を極めた。この工事を担当した地元の人土屋太平は，工事不首尾の際は切腹すると誓い，全財産を投げ出し工事人を激励し自らも先頭に立ってこの工事を完成させたといわれる。

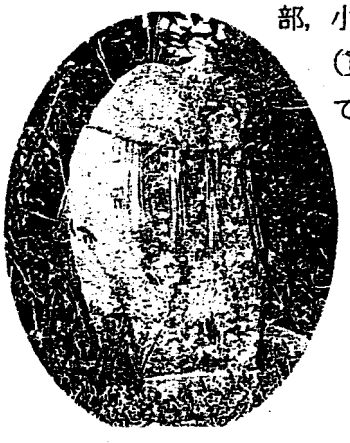
なお上井手川の引野への水路「割り土手」が，春日池からの水路と立体交差するため作られた釣樋は，「備後の釣樋」として有名であったが，市東部土地区画整理事業の施工に伴い撤去されてしまった。



もやい石　五区　綱木

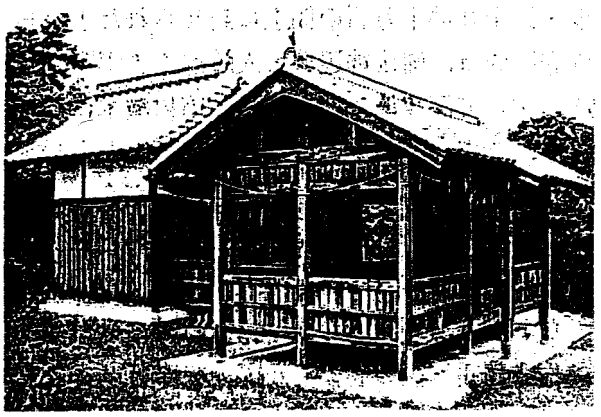
1619年（元和5年），大和郡山の城主から備後・備中九郡十万石の領主に封ぜられた水野日向守勝成は，備後神辺城に入るべくまず鞆に着き，次いで深津湾に船を進めて市村綱木に船を着け，ここから上陸して神辺に向かったといわれている。もやいとは船と船をつなぎ合わせることをいうが，このもやい石のあったところあたりが港であったことを物語るものである。

なお市村（蔵王）沖が干拓されたのは，水野美作守勝重（後の勝俊）が国元総奉行，神谷治部，小場兵左衛門に宛てた1643年（寛永20年）正月の書状によって始められたもので，引野高崎より西の深津浜にわたり堤防が築かれ完成を見た。



「もやい石」そのものは大正の初めごろ迄は存在したがその後動かされたもので，現在の石とは異なるものである

惣戸神社



惣戸神社は三島大明神とも称せらる。三島大明神とは愛媛県越智郡宮浦町に鎮座する大山祇神社のことで，古来より海上守護神として信仰された。綱木と深津の境の惣戸神社も古く船着場があったことから，出入りする船の守護神としてまつられたものである。海が干拓により陸地化してからは農業神としてあがめられた。

なお，祭神については，『備陽六郡志』によると「蔀山の北東の続，つなぎの後小さき山を三嶋という。義昭将軍をいはひたるなり。（中略）當国の中所々に三嶋大明神といへるは，義昭の霊を祭れるなり」と記載されているが，法人登記簿登載の祭神は，「早良（さがら）親王」（四十九代光仁天皇の皇子）となっている。

惣戸神社の社殿は，1985年（昭和60年）に改築された。

三島大明神

そもそも三島大明神とは、愛媛県越智郡宮浦町に鎮座する大山祇神社のことで、この社は仁徳天皇の御宇、百済国より渡来し、摂津国三島に坐し、後現在地に遷し祀ったもので、和多志大神（渡大神）ともいわれ、古来より海上守護神として信仰され、後また農業神、武神として上下の崇仰はなはだ大なる神であった。

この地方にも津之郷町夕倉地区に三島大明神があり、これと同じ音で深津と綱木の境に惣戸神社がある。この2ヵ所とも古くは船着場で、出入りする船の海上守護神として祀られた。また、福山八幡宮の東の宮、すなわち延広八幡は、もともと現在の福山城の南側の山裾にあった。

水呑町の山の神に山の神さんがある。祭神は三島さんと同じ大山祇神であるが、干拓により陸地化してからは農業神となり、祭りの神輿の上に稲穂を結んで巡幸している。

このように民俗信仰は、流行神的要素が多分にあり、元来の神の効用により信仰されていても、客観状勢の変化や人間の欲求の変化によって必要性がなくなると、次第に忘れられていき、その祠は消滅して行く。古書に多く見える神々も、今は既になくなったものが多くある。

市内大門町字中谷にも惣堂八幡がある。その地形を見ると、水野氏が干拓を行なう以前はこの場所は海岸で、帆出の浜という地名もあった。

その由緒によれば、岡石見守を祀るとある。天文年間、四国の河野氏の来襲により、石見守は弓矢に当たって死に、一族も上方へ逃げたが、後に住民がその霊を祀ったとなっており、もともと海上神の惣堂八幡に合祀されたものである。

現在、福山周辺の惣堂、三島は、津之郷、蔵王、大門いずれも同神で、水野氏干拓以前はすべて海辺である。しかし、干拓により海が農地となってからは農業神として祀られるようになった。

巌山観音

蔀山の真北、中央中学校の上に見える岩山、蔵王山の中腹に立派なお堂が木立の上にのぞいている。これが巌山観音である。

岩山の洞窟に石鎚大権現と弁財天が祀られている。洞窟の前東側にお堂があり、本尊は十一面観音菩薩である。お堂の前には石灯籠が二基あり、元禄十年（１６９７）の秋に福山水野藩士の安部野平馬、水野権太夫と砂川右源次が寄進したものである。

この巌山観音は福山水野家の時代、庸徹と言う人が、ここに庵を結んで城下の賢忠寺の和尚を開山として観音像を祀ったと言う。

庸徹庵主の墓が東側の高い岩盤をくりぬいて刻まれて居る。

関係年表　日本書紀・続日本紀から抜粋

６６３年　朝鮮半島白村江において、日本と百済の連合軍が唐と新羅の連合軍と戦い全滅した。反撃を恐れて、対馬から太宰府、そして大和への烽〔のろし台〕を設置、さらに北日本に防人を置いた。そして筑紫から瀬戸内海一帯、河内の高安城まで、各地の要所に朝鮮式山城を築き防御態勢を整えた。

６７２年　壬申の乱により大海人皇子が天武天皇となり律令国家態勢が始まった。

６７３年　備後国守が亀石郡で白雉を捕えて朝廷に献上した。備後の名前の初見。

６７９年　吉備太宰の石川王が吉備で亡くなった。

７０１年　大宝律令により、吉備国が「備前、備中国、備後国」に分割された。

７０８年　国司制度が全国的にスタートし、初代の備後国司として佐伯宿祢麻呂、正五位上が配置された。〔備中国の国司多治比真人吉備は従五位上〕

７０９年　芦田郡甲努村が分離されて、甲努郡がとなった。

７１２年　備後国司佐伯宿祢麻呂が従四位下となった。古事記が編纂された。

７１３年　諸国に風土記編纂が命じられた。

７１５年　郷里制が採用されて、備後国は、９０郷、１６１里、戸数は３，２５０戸となった。当時の備後国の人口は１戸１８人と換算して５８，０００人と推定されている。〔この項は「備後の古代史話」高見茂著から引用〕

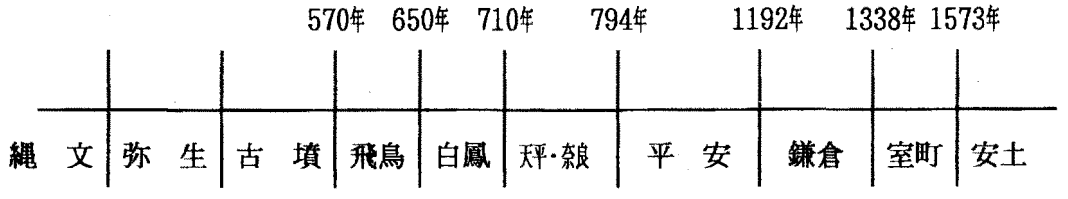
７１７年　備州の賊党が王命に叛いて横行した。元正天皇の命で藤原朝藷が諸勢をを率いて節度使が進発、賊を悉く討ち取った。そして各々城廓を築き、居城した。７２４年大埜朝臣東人をここにおくった。〔備後太平記引用〕

７１９年 7月 全国的に初めて按察使〔あぜち〕が置かれた。
備後国守正五位下大伴宿祢宿奈麻呂に安芸、周防の２国を管掌させた。
播磨国守が、備前、美作、備中、淡路の４国を管掌した。
10月 京、畿内及び７道の諸国の軍団と、大穀、少穀、兵士の定数を地域に応じて減少させた。ただ志摩、若狭、淡路の３国の兵士はそれぞれ廃止した
12月 備後国安那郡の茨城と芦田郡の常城を廃止した。

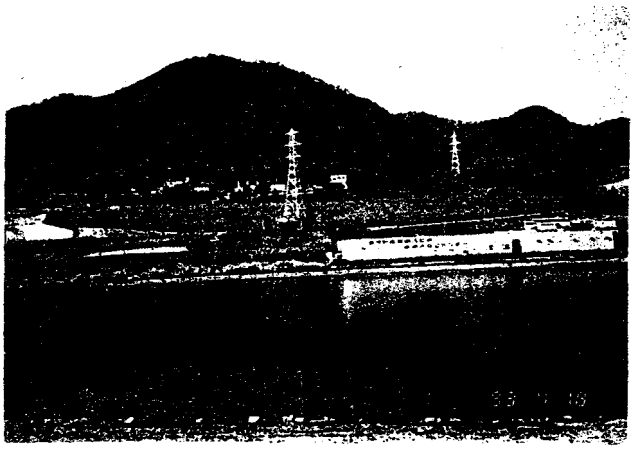
７２０年　日本書紀３０巻と系図１巻が編纂された。

７２１年 4月 備後国安那郡分割して深津郡を置いた。〔深津郡に大野郷、大宅郷、中海郷の３郷を置く〕
7月 長門国に按察使を置いて、周防、石見の２国を管掌させ、備中は備後国の按察使に属させた。

時代の推移



図版　1
蔵王原遺跡と
出土品

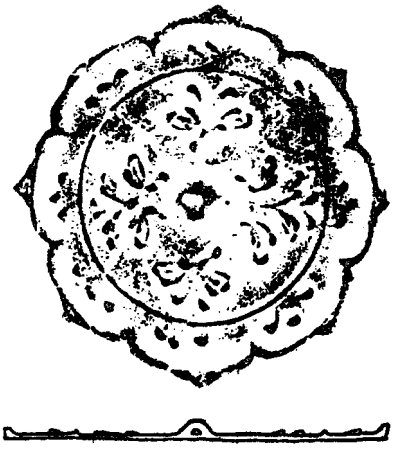


蔵王原遺跡遠景

粘　土　槨

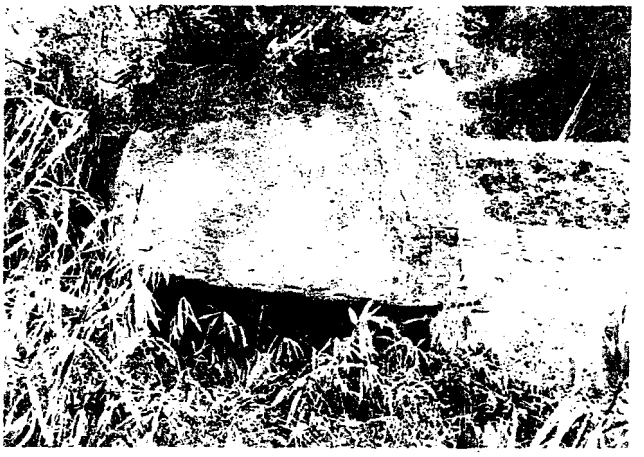
方　形　基　壇

蔵王原出土の三角縁神獣鏡



瑞　花　八　稜　鏡

図版　2
天神山古墳

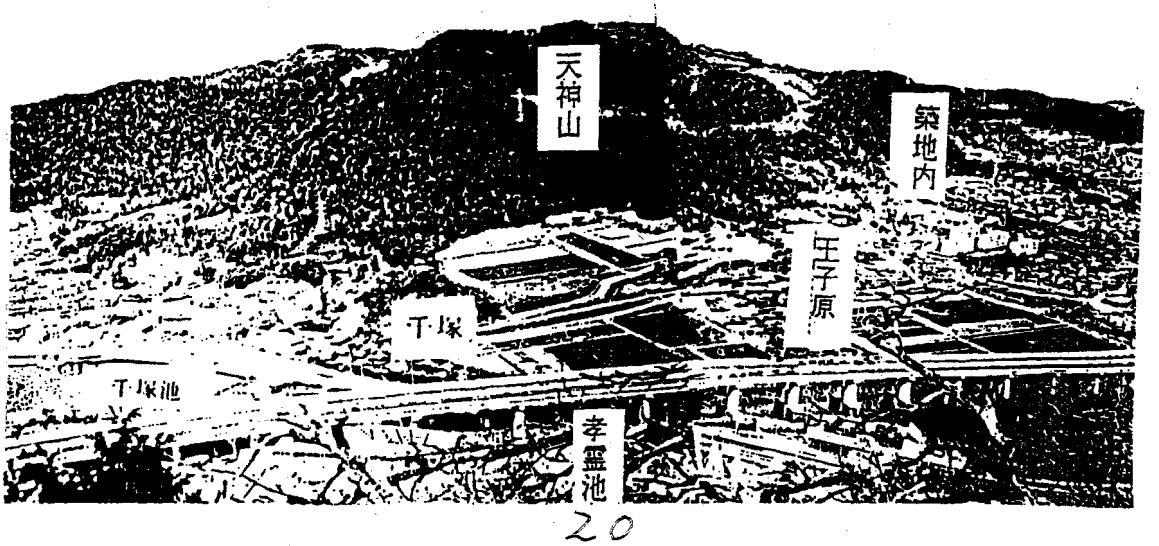


天神山古墳

図版　3
千田大迫古墳

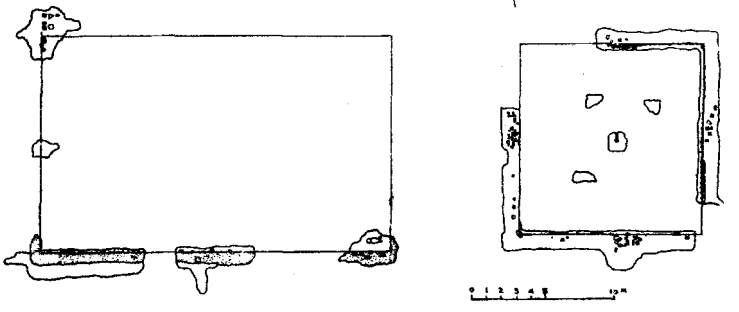
千田大迫古墳

図版　4
孝霊天皇行在所遠望

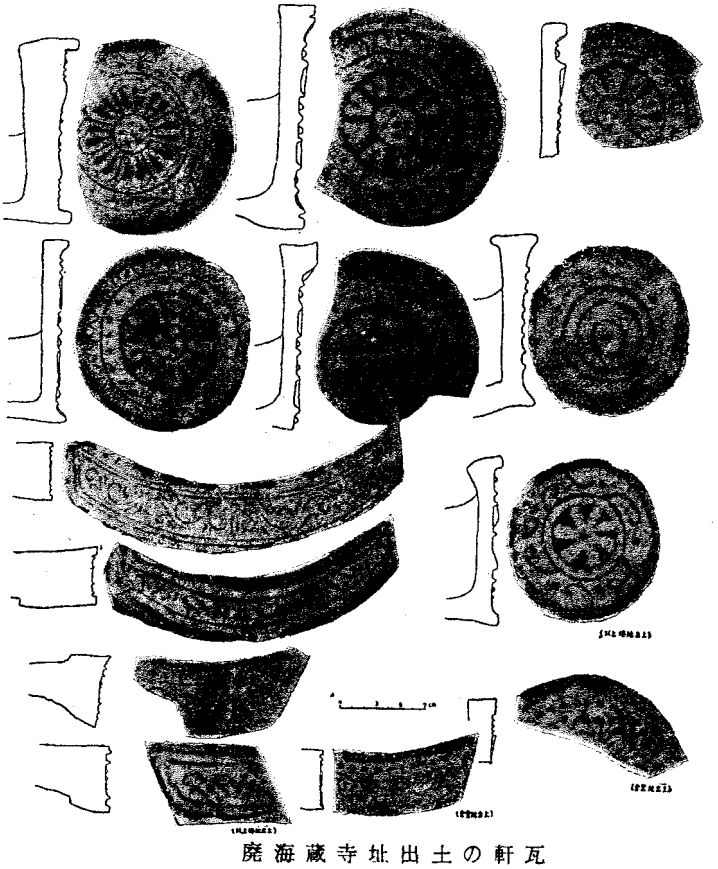


図版5 宮の前廃寺と出土品

宮の前廃寺



海蔵寺金堂址発掘実測図

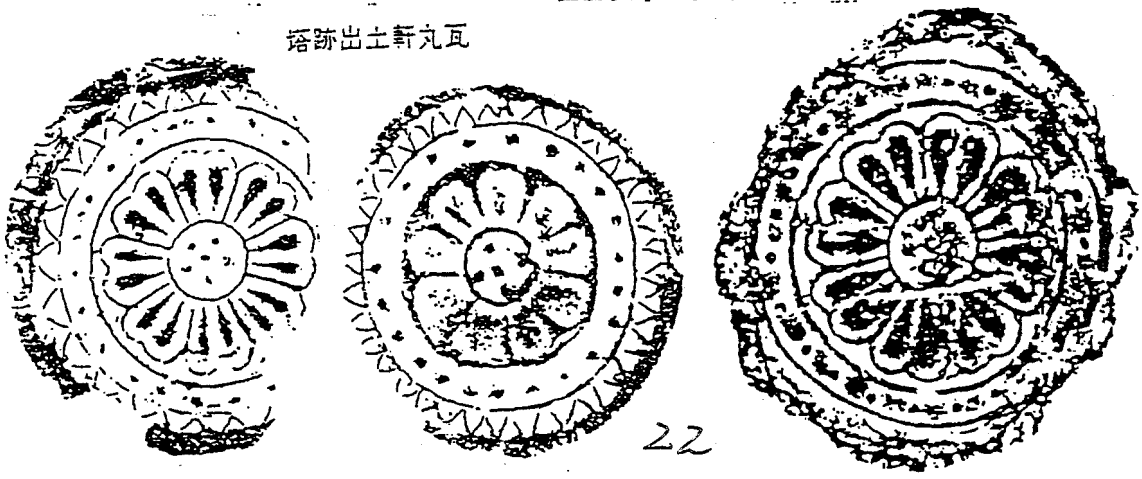


廃海蔵寺址出土の軒瓦

21

出土文字瓦拓影

塔跡出土軒丸瓦



ひかり池
中池
千塚池
千塚
天神山
ナメラ遺跡
天神社
蔵王原遺跡
蔵王山
猿田彦神社
石鎚神社
長池
孝霊池
慶満寺
蔵王
蔵王公園
蔵王小学校
医王
貞光寺
仁王貝塚
稲荷神社
伊勢宮
厳島神社
山王神社
松下天神
鵜明神社
銅木池
上井手川
南蔵王町一丁目
浜前
東深津町
南蔵王町三丁目
南蔵王町四丁目
南蔵王町五丁目
南蔵王町六丁目
東深津町七丁目
銅蓋
荒神社
高崎常夜灯
蔵王町
引野町
引野町一丁目
城東中学校
山陽自動車学校
福山東I.C
吹通し荒神社
弥陀八幡神社
宮の前廃寺
松葉佐神社
御門
宮之前
築地内
王子原
金原池
蔵王原
蔵王山下城主墓
蔵王公園
特別養護老人ホーム
幸楽園
蔵王住宅
福山市上水道
蔵王城山線
日吉台
日吉台住宅
日吉台小学校
平田池
公園
170.5
185.6
208.0
148.7
146.8
74.0
52.0
26.5
19.4
16.2
17.6
17.2
91.7
66.5
46.4
40.0
36.2
28.4
23.2
18.3
13.5
0.6
0.8